

5 A 教職員の専門性に関する課題

研究主題「教職員の指導力向上を図るための教頭の役割」
～学校組織におけるリーダーシップの具体的取組と体制づくりをとおして～

東諸県支会

1 主題設定の理由

深刻さを増す少子高齢化や混迷を増すグローバル情勢、気候変動に伴う自然災害の激甚化、生成AIなどデジタル技術の発展など、社会の急激な変化が進み、先行きに対する不確実性が高まってきている。これらの変化の激しい時代を生き抜いていく子どもたちの教育に携わる教員には、最新の専門的知識や指導技術等を身につけていくことが重要であり、「学びの精神」が強く求められている。

本支会は国富町と綾町の小学校5校、中学校4校の計9校で構成されており、各学校において、様々な年齢層で構成される職員の強みを活かした学校運営が成されている。一方、ICT機器の活用能力や教科指導力、学級経営力など、職員間で差が見られる現状があり、教職員一人一人の指導力や活用能力の向上を図るために教頭が担う役割は、学校組織において重要である。

そこで、学校全体の教育の質を高めるための具体的取組と体制づくりについて、教頭としての役割を明確にし、検証したいと考え本主題を設定した。

2 研究のねらい

教職員の指導力向上のための具体的取組や体制づくりについて、教頭のリーダーシップの在り方を明確にする。

3 研究の概要と成果

(1) 研究内容

- ① 教職員の指導力向上のための具体的取組と教頭とのかかわり
- ② 教職員の指導力向上のための体制づくりと教頭とのかかわり

(2) 各学校の実践と考察

① 本庄小学校の取組

「Googleの『カレンダー』機能を使った授業の助言」

本庄小では、研究主任と話し合い年間一人2回の研究授業を行うことにした。授業参観後は、Googleの「カレンダー」機能を使って、どんな点がよかったのか、どこを改善したらよいかなどを具体的に助言することにした。【資料1】

その際、教頭は、以下の点に留意した。

- 指導について事実を基に具体的に助言し、次回の研究授業、日々の授業に生かせるようにする。
- 授業者がやる気を損なわないように、褒める点は大いに褒める。

また、教職員評価に係るフィードバック時に、授業について触れ、各職員の授業力向上について具体的に成果や課題を伝えた。

その結果、児童へのアンケートでは「先生の授業は分かりやすい」と答える児童が97%になった。

- ・丁寧な導入でした。本時の「マス目がない四角形の面積を求める」という目標が児童に明確でした。
- ・各自の学習スタイルが自由に決められ、一人ひとりが一生懸命学習に取り組んでいました。
- ・「35」とは何の数？→ 1cm^2 という基準の面積が35個分・・・を抑えると、数えるよりも計算の方が便利で早く求められるので、かけ算を使うという思考になったかもしれませんね。

【資料1】 google「カレンダー」活用による助言

② 木脇中学校の取組

本校では、「生徒に委ねる授業」をテーマに月1回ペースで授業の相互参観を実施する等、教職員一人一人の指導力向上を目指し取り組んでいる。教頭として行っていることは、研究主任による職員研修の計画や指導に悩んでいる教職員と経験豊富な教職員とをつなぐ機会の設定など指導力向上への意欲を高めるチーム作りである。自由進度学習等の新たな学び方やICTの積極的な活用等、指導者に求められる力も多様化する中、他校の先進的な取組や効果的なICTの活用方法など各々で得た情報を共有することが学校全体の指導力向上につながる。そのために職員間の人間関係を円滑にし、チームとして学び合う環境作りが教頭としての役割であると考えている。22歳の大卒講師から70代の元校長までの幅広い人材を「指導力を高める」という同じ目標に向かって進んでいくための職員室経営に尽力している。

③ 八代小学校・八代中学校の取組

ア 研修の充実

八代小中学校では、教頭・教務が中心となり、夏季休業中に小中合同の研修会を実施している。前半は生徒指導をテーマに、子どもたちの成長を9年間という長いスパンで支えられるよう、教職員が率直に情報を共有し、連携を深める場を設けている。後半は、学校運営協議会への参加である。ここでは、教職員が地域住民の声を直接聞く機会を確保している。「地域と共に歩む学校」の意義を感じることで、学校運営を自分事として捉え、より広い視野で教育活動を構想するきっかけとしている。教頭としてこうした対話の場を整えることが、組織の結束力を高め、教育力の向上を後押しする原動力となっている。

イ 研修の実際

教職員の主体性を引き出すための実践的な研修となるよう企画・運営を行った。前半は、生徒指導主事による先進校視察の報告を通じ、効果的な指導事例の共有を図った。「学力向上」をテーマとした意見交換を行い、校種間の壁を越えた議論ができた。後半は、地域住民や学校運営協議会委員との合同研修である。あえてアイスブレイクを取り入れることで、教職員と地域が対等に語り合える空気感をつくり、地域協働の基盤となる信頼関係の構築を組織的に進めている。



ウ 成果

- 地域や保護者の意見を反映させた学校運営の推進に向け、教職員の意識が高まった。
- 地域や保護者の意見を反映させた学校運営の推進に向け、教職員の意識が高まった。

④ 綾小学校・綾中学校の取組

地域のヒト（人材）、モノ（環境）、コト（行事や文化）を活用した体験活動を通して、主体的に思考・判断・行動できる子ども

もを育成することを目指し、15年間（幼・保、小、中）を見通した「綾ならではの教育」に取り組んでいるところである。

ア 授業参観のバリアフリー化

（取組内容）

- 綾中学校支援訪問、綾小参観ウィークを設定
- 綾小学校の自由進度学習を参観する時間を確保

（教頭の役割）

- 支援訪問・授業参観の日程を全施設に周知
- 各施設（幼保小中）からの参観希望者の集約
- 訪問学校への希望者の連絡

イ 夏季休業中の幼保小研修会の実施

（研修内容）

- 架け橋プログラム研修（接続の質保証）
- Google活用研修（授業の質のアップデート）
- スクールワイドPBS研修（支援の質の標準化）
- Canva・生成AI研修（業務の質の効率化）

（教頭の役割）

- 研修の日程の連絡調整
- 研修参加者の集約
- 当日の研修会における司会・講評

ウ 成果

- 幼保小中の教職員が互いの授業を参観し、指導法や学習環境の工夫を共有できた。
- ICT活用やSWPBSの考え方が共有され、現場での実践意欲が高まった。
- 幼保小中の系統的な研修により、授業改善・生徒指導・業務効率化を同時に進める基盤が整った。



4 今後の課題

- 地域との協働への意識の向上や教育課程の編成について、窓口となる教頭の役割を明確にする。
- ICTやAIについての効果的活用と指導力向上に寄与していく。